

IAUD Newsletter 第12号 (2009年3月号) 目次

1. 特集：2008年度活動をふりかえって～研究開発企画部会 PJ/WG主査座談会	1
◇「2009年 IAUD ユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」速報	
2. コクヨファニチャーのユニバーサルデザイン	12
3. Case study: 労働環境プロジェクト	
～個人認証におけるユニヴァーサルデザイン～	17
4. 世界のUD動向：第3回 NUDA サロン 雪まつり会場での「気付き発見」	
ワークショップレポート ほか	23
巻末 IAUD Newsletter 2008 年度バックナンバー	

特集：2008 年度活動をふりかえって ～研究開発企画部会 PJ/WG 主査座談会～



IAUDとして今年度最大のイベント「2009年 IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」も先月末、無事に終了し関係者の皆さまも一息というところでしょうか。2008年度も余すところ1か月足らずとなり、今年度最終となる本号では、2008年度をふりかえり、来年度の活動につなげるということで、IAUDの活動のコアとなっている研究開発企画部会の各プロジェクトおよびワーキンググループの主査の皆さまにお集りいただいて座談会を開催しました。名古屋でのUD大会の1週間前という皆さまお忙しい時期でしたが、6名の主査・副主査の方にご出席いただき、これまでの活動のトピックスやご苦勞されたことをはじめ、これからの活動につながる建設的な提案やアイデアなど活発な意見が交わされました。今回の特集で、これらのプロジェクトやワーキンググループに参加してみようという方が、なお一層増えることを願っています。

日 時： 2009年2月19日
場 所： IAUDサロン（東京・八丁堀）
出席者： 住空間プロジェクト 古川雅己主査（パナソニック電工(株)）
移動空間プロジェクト 森 忠雄主査（トヨタ自動車(株)）
労働環境プロジェクト 室井哲也主査（(株)リコー）
余暇のUDプロジェクト 原田 保主査（(株)NTT データ）
メディアのUDプロジェクト 亀田和宏副主査（(株)DNP メディアクリエイティブ）
標準化研究ワーキンググループ 岩片孝司主査（トヨタ自動車(株)）

聞き手： 成川匡文（IAUD 副理事長／情報交流センター所長）
川原啓嗣（IAUD専務理事／情報交流センター副所長）
矢辺憲二（情報交流センターディレクター）
蔦谷邦夫（情報交流センターディレクター）

成川： 本日はお忙しいところをお集まりいただき、ありがとうございます。肩苦しい座談会にはしたくありませんので、自由でオープンな雰囲気でお話しをお願いいたします。

* 活動のトピックスと苦勞・悩み

古川： 住空間プロジェクトの活動はIAUD発足以来ですから、今年で5年目になります。メンバーは現在10数社で32人いますが、定例会議に常時出席されるのは10名程度です。年に1～2回の方がかなり多いという状況です。多くのメンバーに参加いただく、活動のモチベーションアップが課題だと思っています。



次にPJの成果をどう設定するのが大ききなところだと思います。PJの活動で情報収集し知見を社内に持ち帰るとい点では、参加メンバーは成果をあげたといえますが、IAUD全体への成果貢献、あるいは社会への貢献という面ではまだ不足しているのではと思っています。特に大学の先生や専門の研究機関との共同研究ができれば、もっと深堀することが課題ではないかと思っています。

PJメンバーは長い方が約半数もいて、昨年秋には今回の成果発表に向けた合宿を実施し相当盛り上がりました。メンバー間のコミュニケーションは十分取れていると思います。

森： 移動空間プロジェクトのメンバーの出席率は高く、月1回の定例会議への参加も積極的です。発足当時のテーマをそのまま引き継いでいますが、当初の「気づき」を深堀する活動を進めてきました。昨年は深堀の方向性に間違いがないかを確認するために、外に向けた活動を展開した年でした。自分たちのリサーチや活動について、大学の先生やバス事業者様のお話を聞くなど、2008年度はかなり積極的な活動ができたと思います。今後はデザイナーの集まりであることを活かし、実際の提案物につなげていきたいと思っています。ただ、そこには知的財産権の問題が生じるため、こういった形で社会に貢献できるかを検討していかなければなりません。

室井： 労働環境プロジェクトは長いこと会議のUDを進めてきましたが、それもWebで公開して一段落しました。次に何をすべきかの検討を2007年ごろから始めていました。様々な議論の結果、個人認証が次のターゲットとなり、ほっとしているという状況です。ただ、参加している企業の方は、個人認証のユーザーではあるが自社の製品ではないというところもあって、関わり方が非常に難しい面があります。企業としてどう考えるかという動機づけに困っています。たまたま私は事業所引越しがあってICカード認証の大変さを経験しましたので、非常に良い課題だと思いますが、企業にとってどこまでやるのかを考えなければと思っています。



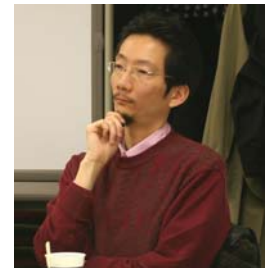
亀田： メディアのUDプロジェクトは昨年8月にキックオフし、これまで5回ほど会合を開きまし

た。最初、メンバー間のコミュニケーションが大切だと思い、飲み会も頻繁にやりました。毎回新しい人がのぞきにきて来てくれて、その人たちが早く賛助会員になってほしいと思っています。はじめの頃、テーマ探しに苦労しました。長続きでき、やっていて楽しいテーマを見つけよう、一社ではできないが皆が集まるIAUDならできるとをやろうと考えたのですが、共通のテーマはなかなか見つかりませんでした。そうした中、主査のカラーユニバーサルデザイン機構の伊賀さんの提案で、まだメディアで見落とされがちな「色」について2009年度は突き詰めてみようかということになりました。現在15団体が参加しています。

岩片： 標準化研究ワーキンググループの主査になってようやく1年を迎えようとしています。活動は2人の副主査に負うところが大きかったと思っています。メンバーも積極的であり、団結と動機付けがしっかりとしたWGだと思っています。去年は、IAUD・UDマトリックスをモチベーションが非常に高く、3人体制での運営でした。団結と動機づけがしっかりとしたWGだと思っています。去年は、IAUD・UDマトリックスを軸に掘り進んできました。周辺ツールであるユーザー情報集と事例集をまとめあげ、研究開発企画部会でも展開しました。さらに予算を使わせてもらってWeb化も進めました。現在は会員内での共有となっていますが、将来の一般公開を視野に入れて活動しているところです。

現在のメンバーは55団体と一個人で、他のPJに比べれば所帯が大きいと思います。毎回の出席者は20人前後で、他のPJと同じように出席者が固定化されつつあるようです。今後については、成果の公開に関する問題と国際化について詰めていきたいと思っています。

原田： 余暇のUDプロジェクトは、インドアとアウトドアにおける余暇のUDを担当しています。インドアはテレビコマーシャルのUD、具体的には地デジのCMの字幕で、アウトドアは旅のUDです。景気の影響を大きく受けているため、字幕の付与はあまり進んでいません。字幕化に必要な放送設備を入れてもコストの回収が難しいのと、2011年の地上波デジタル化に必要な民間放送会社の設備投資額が巨大なためです。また現在の地デジTVCMの中でもデジタル化されているのはほとんどなく、1割程度です。そもそもコンテンツ自体がデジタル化されていない。地デジ以外のところでは少し動きが出てきています。ユーチューブが多言語の字幕を付与しました。ネット上でTVCMを配信する会社が出てきましたが、字幕を付与する企業もあります。アウトドアでは、お台場と東京ディズニーリゾートに行き、サービスを提供している事業者に話をお聞きしました。事業者が提供するデザインやサービスの品質だけでなく、背後にある文化や習慣や法律も大切であることが理解できました。



蔦谷： 皆さんのお話をお聞きして感じるのは、共通性があるテーマ探しにご苦労されていること、それに様々な団体が集っていますので実際の活動でのモチベーション維持に苦労されていることでしょうか。メンバーの半数ぐらいいしか参加されない中で、コミュニケーション上の工夫にはどんなものがありますか。

* 景気の影響？

古川： 活動に参加するための出張ができる人できない人が出てきています。都内での活動の場合は比較的良いのですが、遠くになると参加数が減ってしまう。また都内でやるときも遠方からは来にくい方もいらっしゃいます。この面での支援が出来れば良いのですが。

岩片： 昨年前半は割りと良かったですね。馬場副主査がいろんなネタを見つけては、「この講師の話の聞きに行こう」「施設を見に行こう」などと提案してくれて、メンバーも積極的に参加するなど、活動は活発でした。しかし最近はこのような活動をするのは厳しいと思います。また以前は、メンバー各社のオフィスを借りて全体会議をするだけでなく、ショールームを見せてもらったりして、異業種間の交流ができていました。しかし最近景気後退の影響が足枷になって、このような活動がしばらく状況になっており、少し残念だと思っています。

成川： 最近の経済状況が大きく影響しているわけですね。各社とも出張制限を厳しくしていま

すので、活動がしづらいこともありますね。

森： 昨年は参加者を広げようということで、プロジェクトのメンバーリストには載っているが活動に参加いただけていない企業、または、IAUDの会員企業にはなっているがWGに参加されていない企業に対して、研究活動を説明するなど理解活動を行いました。参加していただくまでには至っていませんが、この活動に興味を持てただけだと確信しています。その他、個人的には参加してみたいが、上司の理解が得られないために断念せざるを得ないなどの声もありました。特に、関東圏以外の地域からの参加は難しい面があります。



鳶谷： 本誌の2月号に掲載しましたフィランソロピー協会さんへのインタビューでも指摘された点で、企業の論理と個人のモチベーションが話題になりました。個人としては参加したいのだけれど、会社にはそれなりの成果を持ち帰らなければならないというところでの悩みが大きいのかなと思います。

岩片： 企業活動というカベが越えられないのではないかと思います。個人ベースではぜひ参加したいという人がかなりいます。モチベーションが高くてぜひ参加したいと思っても、実現しないことが多いと思います。結局のところ上司というか会社は、参加者の個人的な知識や知見の蓄積だけでは、参加を承認することは難しいのではないのでしょうか。

亀田： 月1回の集まりでは限界でしょうね。

鳶谷： その場で集まって活動できる部分と、製品化となるとどうしても持ち帰ってやらないとならないところが出てきますしね。

古川： 住空間PJのメンバーは大半がゼネコンと住宅メーカーの建築士で研究所の人もいます。結局のところ、デザイナーは少なく、持ち帰った情報が次の設計に使われることがあると思いますが、商品開発までには行きません。今、UDプラス、楽しいUDをやっていますが、いかに楽しく暮らすかということで、「家」全体を考えるとという方向になっています。

川原： 関東圏が活動の中心であるため、その他地域からの参加が難しいとのお話がありましたが、距離があってもITを活用するなどして、全国的な展開にできないのかなという気がするのですが、何かうまい工夫やアイデアはないですか。

古川： 私の会社では「テレビ会議」を東京と大阪の間でやっています。住空間PJでは関西地区の企業が多いので、定例会議を年2回は向こうで設定しています。そうすると関西地区の人たちも集まりやすくなっています。

川原： サテライトを関西や中京地区に作って、その拠点に近隣のメンバーに集まってもらって会議をするわけですね。

*会員のメリットと公益性

岩片： 実は少し反省しているところがあります。研究開発企画部会ではいろんなところで使ってくださいとお願いしていますが、実際の使い勝手については把握していないのが実情です。自分たちで使ってみて、その結果を見て改善の議論はしていますが、手前味噌にならないようにしなければならない、と思います。本当にいろんな業種の中できちんと使われているのか確認する必要があると思っています。皆さんの意見・評価を把握したいと思います。公開は非常に難しい問題です。UDの普及と、現在、会員数が増えてはいない状況の中で、会員になることのメリットのアピールはジレンマでもあります。

室井： 労働環境ではUDマトリックスを使いました。モノを考える最初の段階で、そもそも何を考えなければならないのかを把握する際に大きな指針になります。しかし、製品化を考える人にとっては無理です。スペックが書いてあるわけではないし、当然のことながら書けるものでもありません。

岩片： ご指摘の通り、UDマトリックスには、どこまでやったら良いという基準までは提示していません。製品によっては異なる基準もありますし、場合によっては、企業ノウハウの領域に関わってきます。こう言ったことも議論して、まずは、UD開発の視点の提示と共有化

としてUDマトリックスを提供しようというのが、現時点でのWGの結論です。

蔦谷： 最近のマーケティングで言われる「ペルソナ」の手法がありますが、UDマトリックスも同様にユーザー像の情報を共有するという面で有用なのかなと思っています。

岩片： 大学で人間工学・UDを目指す学生の演習で使われていますが、これは非常にありがたい使い方だと思います。製品を見てマトリックスを自分なりに作って視点を養うといった、どのようにしてUDを達成するのかの考え方を身につけることができます。企業活動以外で出口を拡げていけば、それなりに裾野が開拓できるのではないかなと思っています。

成川： プロジェクトに関連する製品を設計する人達が参加しているわけですが、昨今の企業の経営状況では、成果を持ち帰って会社のためになるものがなければ参加しにくいという面があるとは思いますが、しかし参加するのは、自分の会社の商品開発に参考になるからという考えなのか、それとも、同じ業界の人が集まり、標準化ではないけれど共通な問題として取り上げて、成果を会社のためというより世の中のためといった考え方もあります。どちらの方向を向くかによってテーマの選定が変わると思います。参加している人たちのモチベーションはどちらを向いているのでしょうか。製品開発に絡む部分で企業が集まって共同研究をする場合、ライバル会社が集まってしまうと、ソコソコのものしかできないということがあると思いますが、皆さんのところはいかがでしょうか。



IAUDとしても、誰のために活動しているのかという大きな問題があります。多くの企業が会員として参加いただいていますので、会員のメリットという一方で、世のため人のためという公益性も重要なわけです。この辺の絡みをどのように考え、今後IAUDはどこを向いていくのかという課題があります。皆さんはどのような感じで捉えられているのでしょうか。

森： 例えばカーナビゲーションについては参加メンバー間で競合の関係にあるため、あえて手をつけていません。またエレベーターも同様です。自動車コックピットを題材にする際、エアコンのコントロールに関するUDを選んだという側面があります。企業の枠を超えて、競争領域の手前にあたる部分を底上げすることが目標ですが、どこでその線引きをするのかが問題になります。研究対象を少しズラした方がやりやすい。でもそうすると、上司からは何を成果としてつかんできたのかと言われてしまいます。

成川： 自動車の運転席周り（コックピット）も家電製品のようにしようというのは少し際どいところがありますね。何でエアコンなのだろうと思ったことがありましたが、そういった側面があったのですね。参加される方のモチベーションを考えると、企業としても勉強してこいよというなら良いのですが。

亀田： 自分の時間に対して裁量権がある人しか、参加しにくくなると思います。管理されている立場では、参加しにくいし理解を得にくいと思います。企業には、総論賛成、各論反対というところがあって、細部になればなるほど、また現場に近くなればなるほど、自由度が少なくなってしまう。

古川： 住空間PJでは、5年前に議論をしました。製品化は各メーカーの仕事であり、ワークショップなどでの気づきや製品提案のスケッチなどを持ち帰って、各企業で自主的に要素に落とし込む、UDの気づきを中心にやろうとなっていて、その考え方に変わりはありません。それ以外の活動では、UDを配慮した物件を見に行くリサーチ活動で、その情報を会社に持ち帰って検討していただく。今回の発表会などでそれらの情報を広く会員の方に提供するところまでで、具体的な製品化までは行っていません。

蔦谷： そういうところから出てきたものが、IAUDの活動の成果として認識され、後々の活動につながるかということもありますね。

亀田： IAUDの大きな機能は「プラットフォーム」だと思います。IAUDという場所があれば、様々な産業が集いやすいこと、またヒアリングについても、一企業では無理な場合でもIAUDなら受け入れてくれます。そして社会に対して提言し情報提供していくことなども主な責務ではないでしょうか。

*コラボレーション、プラットフォーム、情報共有化

蔦谷： 各プロジェクト間のコラボの可能性についてどのようにお考えでしょうか。PJはひとつのまとまりとなって活動していますが、IAUDのメリットを活かしてもっとフレキシブルに活動を横に繋げていくことも可能性としてはあると思っています。勿論、固定的に広げると難しさが出てきますが。

原田： 例えばCMの字幕というのは正しくメディアのUDです。動画コンテンツに字幕を振ることは実は労働環境の問題でもあります。最近のオフィスでは会社幹部の講和をデジタルで流すこともありますが、執務中であれば音を出して聞けません。そんな場合、字幕を付けるというソリューションがあると思います。

亀田： 見学などに行くと、他のPJで以前に行ったことがあった所だったりして、結構かぶることがあります。PJが設定した見学や懇談会に他のPJのメンバーが自由に参加できるよう、情報が流れる仕組みがあればと思います。私の場合、複数のPJに参加しているメンバーがハブになって情報をもらって参加できたのですが、そういうことで情報の共有化が進めば良いのではと思います。そうすることによって、新しい気づきや認識を得ることができるのも事実です。



蔦谷： 確かに、見学会や先生の話聞く催しを共通にやっても良いのかなと思います。

原田： 余りフォーメーションを固定的にする必要はないと思います。PJの主査経由で情報が降りてくるだけでなく、メンバーが自由に他のPJの情報も掲示板でダイレクトに見えるようになればと思います。

森： 主査の間でお話する機会はありますが、メンバー間ではありません。年に一回の年度末報告会やUD大会以外に、メンバー同士が話す機会が無いのが実情です。

古川： 研究開発部会で皆さんの話を報告していますが、なかなか時間を十分割くことができません。

蔦谷： スケジュールの共有だけでも、きっかけとしてはあるかなと思います。

川原： それぞれのPJが実施する会合の案内を事務局経由で会員に流すという手はあると思います。発信をうまくやっていただければ会員の皆さんに呼びかけることができます。メールで発信するか、HPにスケジュール表を貼り付けて各PJの予定が書き込まれていれば、皆で情報が共有化できます。ただ順次書き込めるようにするには、ネットの構造を変える必要がありますし、適したものとそうでないものもありますので、検討をしなければならぬと思います。これも情報交流センターの課題かと思っています。

知識や情報のプラットフォーム化が重要ですね。それぞれのプロジェクトに違った案件があるでしょうが、PJやWGだけではなかなか難しい面がありますので、部会や事業委員会にも相談してやってもらいたいと思います。Webに関しては情報交流センターがあります。それぞれの部署間の連携をうまく取って実現していくことを我々としても考えなければならぬと思います。

岩片： プラットフォーム化は今年の実組の一つかと思っています。ある障害に対していろんな対応策がとられていますが、それは企業ノウハウや製品の制約などによるものです。しかし本当に効果的で、これだったら色んな製品に使えるという対応策があれば、お客様は迷わないと思います。例えば目が見えない人がスイッチを入れる場合、どんなナビでもコピー機でもテレビでも同じようなことができれば迷えないわけです。そういうアプローチも標準化からはあるのかなと思います。そういうものが対応策のプラットフォームであって、その製品の特色や企業ポリシーやノウハウを反映させ、より効果的に高めるというやり方があります。ベースはここで話し合っていけばと思っています。



蔦谷： 主査の間では情報交換の場というものがあるのですか。

岩片： 部会は活動報告で終わっています。イベントについては事後の報告になっていますの

で、前出しになっても良いと思います。

原田： 居酒屋やすし屋に置いてあるタッチパネル注文端末などの例は各PJにまたがるものだと思います。余暇、メディア、標準化にも関わるものです。

亀田： 後発のPJとしては、先行PJのテーマに手をつけないということもあります。

鳶谷： テーマの整理が、どこかで必要かも知れないですね。

古川： IAUD Newsletterは各グループの活動が見えて整理できるので、ありがたいですね。

* 賛助会員への支援

川原： 賛助会員の方は企業と比べて経費的に厳しく遠方への出張がしにくいと思います。IAUDとしては交通費を支援することはできません。しかし、講師としてお招きするなど、何か良い提案はないでしょうか。

古川： 賛助会員は自らの意思で参加されていますのでモチベーションも意志も高い人達です。何か支援策があればと思います。

亀田： PJの活動では私たち企業人とは視点が違うので、参加してくれるとありがたいと思います。ただIAUDの成立を考えると会員企業のために守るべきところがありますので、外部のステークホルダーが参加されることは、難しい割り振りが必要になってくるのではないのでしょうか。会員企業ですか賛助会員ですかと聞かなければならなくなってしまいます。

鳶谷： Webの中でも層別して見えないようにしているところもありますが、公益性を考えるとどうすべきなのでしょう。

亀田： 情報は発信すればするほど集まってくるというものなので、とにかく情報を発信することだと思います。お代は見てのお帰りのな感じで、とにかく入会してもらうことだと思います。

古川： IAUDが定期的にセミナーやイベントを、自主的に開催することを考えたらどうでしょうか。一般の人でも参加できるようになります。交流センターが担当して3ヶ月に1回開催するなどを行ったらどうでしょうか。会員勧誘も進むのではと思います。

川原： 設立当初は2ヶ月に一回やっていました。定例セミナーも再考する必要があるかも知れませんが。情報交流センターか普及事業委員会が担当することになるのではないのでしょうか。

古川： その場合、例えば午前中はイベントがあつて午後から会議というように、イベントと定例会議をセットすると活動に参加しやすくなります。

室井： 方法論はわからないのですが、会員企業のUD専門部署でない人も参加できるような仕組みにできないのでしょうか。

亀田： IAUDの加入手続き時の稟議部署に情報が入るのですが、よその部署に回らないことが普通ではないのでしょうか。社内の決済プロセスが影響していて、なかなかオープンにならないわけですね。企業文化を少しかえる必要があると思います。いわば社内口コミが必要です。

成川： 社内の問題は大きいでしょうね。最初に接触したところがUDに最も近い部署で、その他の部署に情報が流れないことが多分にあると思います。

* 国際化：まず英文化して情報発信を！

鳶谷： 2010年度の国際会議に向けた2009年度の活動について何かないでしょうか。

岩片： WGの中では国際化について議論をすることがあります。国際会議を開催することが国際化ではないと思います。皆さんは国際化についてどうお考えでしょうか。私たちのPJでは、ある障がいを持つ人の、海外の国々での状況と対応策、その中での先進的な取り組み事例などを把握して、それが対応手法の標準化で役に立たないかなど、自分たちでできるアプローチへの着手を始めています。各PJではどのような議論がされているのか、参考までにお聞きしたいのですが。

森： 乗り継ぎに関する移動情報のチームでは、日本の都市圏の駅や駅前などに絞って研究しています。その中で国際化については外国語標記を検討しています。今後は海外の事例を勉強して行こうと思っています。

川原： いろんなアプローチがありますが、まず素直に自分たちの活動の成果を英語に換えて世



界に発信することが大切です。単純なことが最初のステップです。UDに関して日本が相当進んでいることが意外と知られていません。私も海外で講演することがありますが、日本の先進性に驚きもっと知りたいというリアクションがあります。先般来日されたスペインのアラガイさんも日本は進んでいるのもっと情報を海外に出してほしいと要望されていました。まずは発信し、そのリアクションが我々の次のステップに役立ってくると思います。これが最も近い意味での国際化ではないでしょうか。

岩片： IAUD全体の方針の打ち出しが必要です。

川原： まさに情報交流センターのミッションなのですが、まだ十分にやりきれているとは言えません。

成川： 国際交流・国際関係はひとつの大きなテーマとなっていて、情報交流センターだけではなくIAUD全体の課題でもあります。IAUDの役割のひとつは、UDについて検討し情報を世界に発信することで、設立当初から国際化が課題でした。

岩片： 世界に向けて発信するからにはHPを英文化しなければならないし、我々WGのIAUD・UDマトリックスも英文表記を検討していく必要があります。

成川： 情報交流センターかまたは理事レベルで検討し理事会で方針を決定し、具体的な活動計画を立て、各PJとWGにお願いしなければなりません。HPの英文化は以前から課題になっていますが、現実的には十分な予算がなくて進展していません。今後は国際化に向けて、どこに予算を重点的に配するかを検討をして、2009年度は、まずHPの英文化をしっかりと進めなければならないと思います。必要な情報を集めるのは重要ですが、自分たちでまとめたものを発信することがまず大切だと思います。あまり手間暇かけずに英文化して、しかるべき人に発信して反応を見るということも必要だと思います。

原田： 居酒屋さんのタッチパネル注文端末を海外に向けて是非プロモーションしたらどうかと思います。日本を訪れた外国の方に見せると、必ずと言ってよいほど感動されます。写真入のメニューとタッチパネルなどは、子供にも言葉が分からない外国人にもわかりやすく、素晴らしいソリューションだと言われます。

成川： 2010年の国際会議に向けて、2009年はそれを意識した情報発信・HPの充実が必要だと思います。

亀田： IAUDは研究機関であり情報発信機関でもあるなど、様々な側面があります。PJとWGは研究開発するという役割をどのようにして担っていくべきか、メンバーの皆さんと考えていきます。情報発信のところでは、部分情報を束ねるところにIAUDの価値・意義があるのではないのでしょうか。一社で伝えようとしてもなかなか伝わらないことがあっても、IAUDプラットフォームがあるとアピール度が高まってうまく伝わり、参加企業にもメリットがあると思います。

室井： 情報発信でネックになると考えられるのは知的財産権の問題です。企業行動としては、重要な情報を隠そうとしがちですが、IAUDは積極的に公知にしていくという方向の活動をしてほしいと思います。

川原： 基本的には公知に向けて活動をしていると考えています。企業が既に持っている権利を侵さないように配慮するのは当然のことですが。

森： メンバーの参加が減ってくる恐れがあると心配しています。現在2チームで進めていますが、1チームにしなければならないことも想定されます。二つの流れを一つに集約し、力を分散させずに良いものを作っていきたいと思っています。

古川： 数年前に浴室を欧米と比較したことがあります。日本の方が進んでいました。今年は別の部位または暮らし方などで欧米と比較して深堀したいみたいと思っています。

成川： 本日は長い時間、ありがとうございます。まだまだ話し足りないこともあるとは思いますが、今後ともよろしく願いいたします。本日は長い時間、ありがとうございます。

(了)

「2009年IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」速報！

名古屋市中小企業振興会館（吹上ホール）において2月27日（金）・28日（土）の2日間、開催されたこのイベントは、IAUDが年度末に開催している活動報告会を発展させ、首都圏だけでなく全国各地で開催し、UDを各地にしっかり根付かせようという主旨で企画されたものです。

今回はその第1回目として、総裁である寛仁親王殿下をお迎えし、シンポジウムと展示会および特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」のプレゼンテーションと公開審査が行われました。詳しくは本誌来月号やWebでご報告しますが、まずは、会場の雰囲気速報でお伝えします。



【シンポジウム：研究開発企画部会活動報告】

27日午前中、大澤研究開発企画部会長から全体概要が報告された後、住空間、労働環境、移動空間の3プロジェクトと標準化研究ワーキンググループから詳しい報告が行われました。

<プレゼンテーション画面抜粋>

住空間PJ

●誰もが心が暮らせる「楽しいUD」を実現する住空間づくりを目指す。

●建築底下を妨げ向上させる、新たなUDコンセプトの提案

●先導事例によるUD解決視点の調査

●ユーザー参加型ワークショップの開催

●UDプラス（楽しいUD）

●今後の課題：UDプラスの視点から、デザインによってモチベーションや行動を引き出す提案を行う。

労働環境PJ

●個人認証操作におけるUD研究により、様々な人々が気持ちよく働ける未来オフィスの労働環境の提供を目指す。

●個人認証の利用シーンと問題点の抽出

●ICカードを事例にUDマトリクスでタスク分析

●入退館

●入室内

●食堂

●今後の課題：有識者コンサル、フィールド調査などを通して、課題の詳細化と解決策を探る。

IAUD 2009年IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海

UD Universal Design Exposition in TOKAI 2009

この人工音声をもちと便利なものを考えようともっとトになって頑張っております。なかなか難しいようですが、もっと開発をして、

移動空間PJ パブリックチーム

●移動情報のUD調査手法の研究により、公共交通のシームレスな移動空間の実現を目指す。

●調査範囲を「駅～バス停」間をフォーカス

●調査シートのブラッシュアップ

●対象を絞る

●直感的

●交通事業者・利用者の情報交換

●詳細に

●今後の課題：自治体・関連事業者の具体的な案件で、調査～改善指針の提案を行う。

移動空間PJ パーソナルチーム

●「使いやすくから」使ってみたくなるUDの研究により、カーコックピットの最適なインターフェースを目指す。

●自動車会社との意見交換

●「使ってみたくなる＝楽しいUD」実現のためのキーワード抽出

●ペルソナによる「使ってみたくなる」操作の検討

●今後の課題：UD実現のキーワードの妥当性を追及し「楽しいUD」の発現に役立てる。

まちづくりPJ

●UDまちづくりのビジョンの策定と、それにもとづく具体的なデザイン提案の実施

●UDまちづくりのビジョン

●現場風景 UDがキャッチアップの実現

●「川崎市二ヶ領用水沿河原緑地」を対象としたまちづくりの提案

●アクセシブルルートの提案

余暇のUD PJ イントアチーム

●生活者の意識調査や関連団体への働きかけを通してテレビCM字幕の実現を目指す。

●関連各庁事務次官へのアピール

●字幕サンプルによる生活者ニーズ調査

●関係団体との意見交換

●今後の課題：関係団体との情報交換や、伝わりやすい字幕表現の研究を行い、2011年のデジタル放送移行にあわせCM字幕実現を目指す。

余暇のUD PJアウトアチーム

●人と環境設備の連携により、最適なサービスが提供される「うれしい、楽しい、面白い」旅の実現を目指す。

●障害のある生活者と共に新しい気づきを得るためのお台場ツアーを実施

●「旅のUD」目標の設定

●今後の課題：放送で誰もがほしい情報をいつでも得られる、案内情報のあり方を研究。

衣のUD PJ

●全ての人に使いやすいUDと、個性や流行を重視した「ファッション」との融合を目指す。

●IAUD国際会議2010に向けてのロードマップ作成

●「産・字の協創」をテーマとした調査抽出

●今後の課題：素材メーカーなど参加会員を増やし、IAUD国際会議2010に向けて試作提案及び、素材開発の推進を目指す。

食のUD PJ

●食品パッケージ（表示～形態）のあるべき姿の研究を通して、UD視点での快適な食生活の実現を目指す。

●「いやけど注意」ピクトグラムの共通化・標準化の検討

●アレルギー表示の研究

●高齢者・視覚障がい者の使い勝手調査実施（大字と造形）

●一般生活者のWeb調査実施

●今後の課題：JIS評価方法などを客観的な意見収集による、ピクトグラム検証、および一般生活者を対象としたWeb調査の実施

メディアのUD PJ

●「色」をテーマに、メディアにおけるUDの課題を関係機関に発信し、情報弱者への社会的配慮を促す。

●UDの新しい領域として発足。15団体のメンバーが集結し目標を設定。

●メディアの様々な要素から「色」をテーマに調査

●今後の課題：PJメンバーを増やし、具体的な課題発見と対応策の検討を行う。

標準化研究WG

●「多様な人」を対象にする製品・サービスづくりに役立てるため、より使い易い「IAUD-UDマトリクス」の開発を目指す。

●ユーザー特性ごとの関連情報を集約した「カード式」ユーザー情報集作成

●ユーザー特性ごとに配慮された事例集の作成

●ユーザー情報と事例集のWeb発信（2010年～最新第9号）

●今後の課題：データ更新や新しい事例追加など維持管理方法の検討、海外事情などの情報の追加を目指す。

【シンポジウム：山本会長あいさつ】



27日午後のプログラムに先立ち会長からあいさつがあり、設立から無事5周年を迎えられたことに対し、節目において殿下のお言葉が活動の強い推進力となったこと、関係諸氏への謝辞などが述べられ、「世界と協調しながらユニヴァーサルな社会を創っていく」というIAUDとしての決意で締めくくられました。

【シンポジウム：寛仁親王殿下おことば】

IAUD設立にまつわるエピソードや名古屋でのさまざまな活動への関わりなどを中心にお話されましたが、約15分間のお話すべて、人工喉頭を使用してお話され、自ら実験台になって人工喉頭の改善に参加されていることなどがご紹介されました。



【シンポジウム：基調講演・パネルディスカッション】



「ユニヴァーサルデザインのある暮らし—暮らしの中の移動と心のUD」というテーマで、本誌11月号でもご紹介した名古屋の社会福祉法人AJU自立の家の山田昭義専務理事の基調講演が行われました。その後パネラーとして山田氏と同じくAJU自立の家の浅井貴代子施設長、(株)INAXの加藤純デザインセンター長、トヨタ自動車(株)の長屋明浩デザイン開発部長、(株)日建設計から赤司博之理事の4氏が加わり、牧野克己普及事業委員長(IAUD理事)をコーディネーターにパネルディスカッションが行われました。

山田氏の基調講演では「楽しくなければ福祉じゃない!」を合言葉とするAJU自立の家の活動が紹介されました。名古屋での35年間にわたる障害者の自立を支援する活動へのチャレンジは独自のビジネスとしても実を結んできました。記憶に新しいところでは中部国際空港セントレアや2005年の愛・地球博(愛知万博)のユニヴァーサルデザイン対応のコンサルテーションがあります。山田氏ご自身の体験をもとにしたお話は、さまざまな問題が浮き彫りにされ、UDの普及活動を進めていくうえで示唆に富んだ内容で、説得力あふれるものでした。



【特別ワークショップ「48時間デザインマラソン」】

シンポジウムと展示会の開催に先立ち、25日からスタートしていた「48時間デザインマラソン」は、回が重ねられIAUDの主催するイベントの大きな顔ともなってきました。荒井利春金沢美術工芸大学教授が全体の監修のもと、当事者であるユーザー、企業のデザイナー、デザイン学生などがメンバーとして参加、プロのデザイナーがチームリーダーとなって5つのチームが構成され、ユーザーとの対話を基に具体的なデザイン提案まで48時間でまとめ上げるというプロセスが進められました。詳細は別の機会に譲りますが、今回も熱いディスカッションが展開され、メンバーそれぞれの特性を生かした提案が行われ、会場の参加者の投票により「ベストデザイン賞」と「ベストプレゼンテーション賞」、審査員により「チャレンジ賞」、「未来技術賞」、「チームシナジー賞」がそれぞれ選出されました。



<情報保障>

今回のUD大会ではシンポジウムのすべてのプログラムについて、手話通訳、パソコン要約筆記による情報保障が行われました。また、磁気ループ補聴システムも使用されていました。

車いす対応としては、動線を考慮した会場レイアウトが行われており、ステージへの昇り降りなど会場設備での対応が不十分なところは、車いすのリフターが今回のイベントのために用意されるなどきめ細かな配慮がされていました。

また、忘れてならないのが延べ20名以上のボランティアの皆さんによるサポートで、会場内の誘導やスロープでの車いす補助など、献身的でさりげないサポートが行われていました。



【展示会】

会員企業や自治体、大学などの教育機関などによるUDに関連した展示が行なわれました。IAUDの活動成果もパネルを中心とした展示により紹介されました。シンポジウムの合間を縫って寛仁親王殿下と山本会長も会場を巡回され、最新の製品や取り組み事例をご覧いただきました。初日にNHKのTV取材をうけ夕方の番組で流されたこともあり、会場は2日間で1,000名を越える来場者でにぎわいました。



*詳しくは本誌来月号やWebでご報告したいと思いますので、お楽しみに。

コクヨファニチャーのユニバーサルデザイン

コクヨファニチャー株式会社
デザイン室 木下 洋二郎

■ はじめに

コクヨファニチャーでは「商品を通じて世の中の役に立つ」というコクヨグループの企業理念の下、ファニチャー製品を通してお客様に「ひらめき・はかどり・ここちよさ」を提供することを目指しています。ここでは、弊社のデザイン指針とユニバーサルデザインの考え方、それに基づいて開発された商品をご紹介しますことで、弊社のユニバーサルデザインに対する取り組みの一端をご理解いただければ幸いです。

■ コクヨファニチャーのデザイン指針

「ひらめき・はかどり・ここちよさ」を提供するファニチャー製品を実現するために、オプティマムデザインという独自のキーワードを掲げ、環境、人、社会のすべてに最適なデザインを提供することでより良い未来を創造することを目標としています。

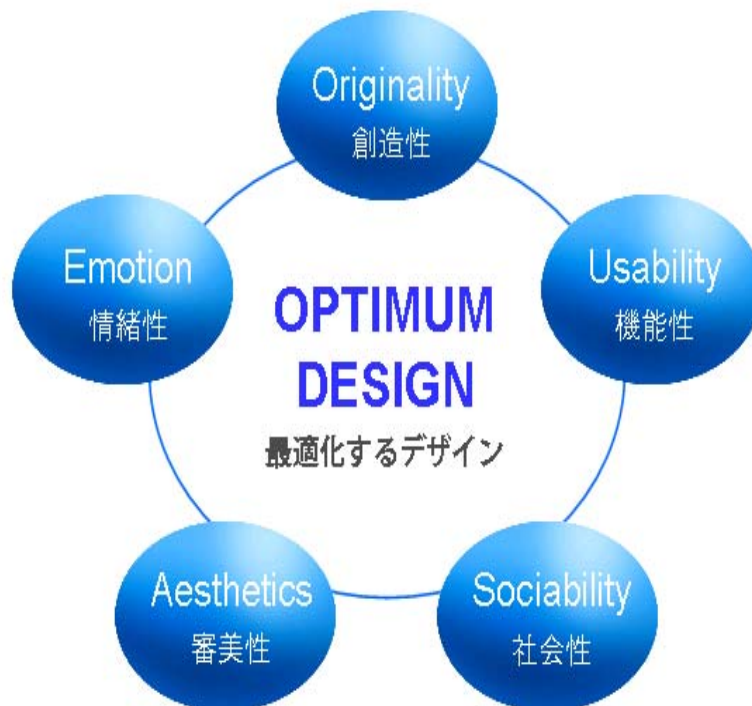


図1：オプティマムデザインと5つの要素

オプティマムデザインを実現する要素として、創造性、機能性、社会性、審美性、情緒性の5つのキーワードを挙げ（図1）、それぞれの項目を最適化するデザインを目指しています。特に機能性に関しては様々なユーザーや使用シーンを想定し、それぞれの場面で最適化を図ることでユニバーサルデザインを実現し、できるだけ多くの人を使いやすいデザインを心がけています。

■ コクヨグループのUD 製品に対する6つの要件

お使いいただくユーザーを常に意識した製品作りを進めるために、「ユニバーサルデザイン」の基本精神をもとに、コクヨ独自の「6つの要件」を設定しています(図2)。この6つの要件を製品開発において常に意識することで、すべての製品を使いやすく人に優しい商品にしてゆくことを目指しています。

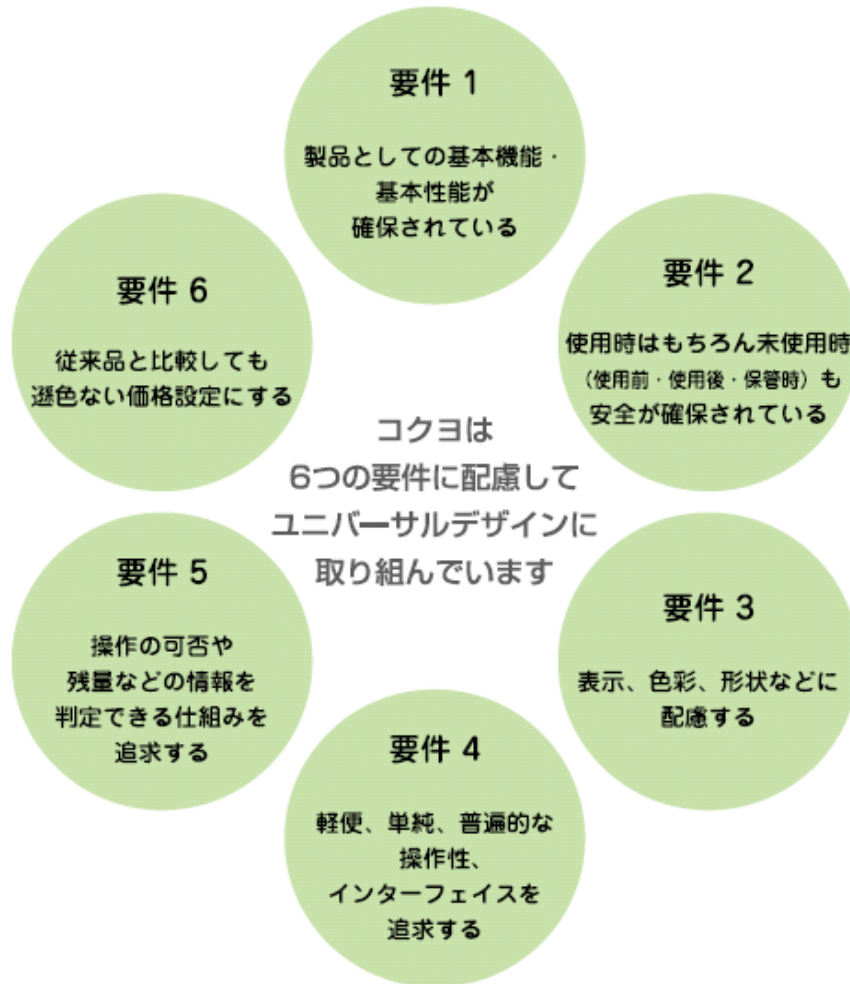


図2：6つの要件

■ 製品事例

ユニバーサルデザインを製品で実現するにはいくつかの方法が考えられます。ここでは3つの異なるアプローチで開発された商品の事例を取り上げます。最初に、ひとつの製品をより多くの人に使いやすくする方法で開発された収納システム。次に、様々なオプションや交換パーツでそれぞれの人に最適な仕様を提供する事務用回転イス。最後に、機能を絞り込むことで製品を分かりやすくした事務用回転イス。これらの製品を通して弊社のユニバーサルデザインについてご理解いただければ幸いです。

1. アクセスのしやすさと庫内の最適な活用を実現した収納システム（図3）



図3：UFX システム収納



図4：フリーアクセスの取っ手

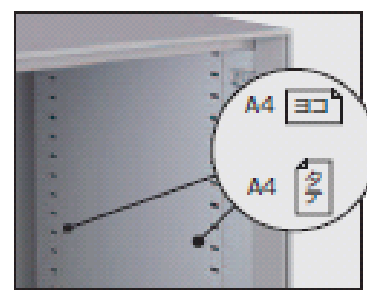


図5：ピッチマーク

- ・フリーアクセスの取っ手（図4）

両開き扉と引き出しの取っ手を共通化し、上下左右どの方向からでもアクセスできて握り手を気にすることなく扉を開閉することができます。大型のため指の掛かりも十分です。また、フラット性を追求し、扉面からの出っ張りをなくすことで、衣服などを引っ掛けることなく安全性にも配慮しました。

- ・棚変えが簡単、親切なピッチマーク（図5）

棚爪を掛ける穴には、定型書類をぴったりと収納する場合に便利なピッチマークを表示しました。A4 サイズの縦と横のそれぞれに適した穴位置に表示。穴の数を数える必要がなく、簡単に棚爪を取り付けできます。

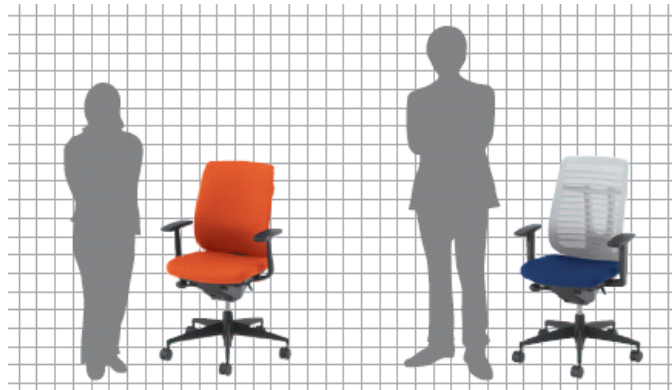
- ・フレキシブルに使えるセパレートシステム（図6）

庫内は定型書類をぴったり納める棚割りから雑多なものをフレキシブルにすっきりと小分けに収納できる、棚板のセパレートシステムを採用しました。部分的にトレイを取り付けることも可能です。



図6：セパレートシステム

2. パーツの組み合わせにより様々なユーザーに対応（事務用回転イス ベルガー）



- ベルガーは体格や個人の好み、あるいは用途や空間のイメージに合わせて、各パーツの自由な組み合わせが可能です。約 10,000 通りの中から最適な仕様をお選びいただけます。（図 7）



図 7：組み合わせ例

- 体格に合わせて選べるクッション

座面の大きさは身長に合わせて 3 種類から選べます。イス本体の奥行き調整機構と合わせて身長差に細やかに対応します。また、クッション硬さはお好みに合わせてスタンダードとソフトの 2 種類から選べます（図 8）。交換は簡単に行えるワンタッチ式ですが、セーフティロック機構を設けて安全性にも配慮しています。（図 9）

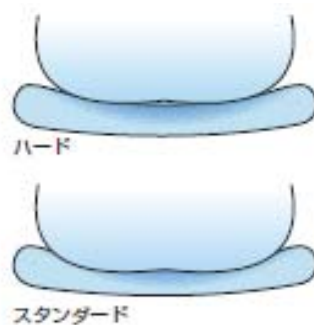
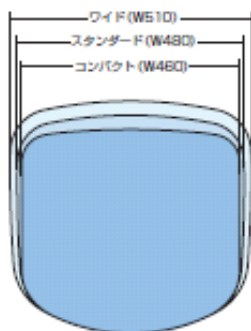


図 8：クッションバリエーション

図 9：クッション交換

3. 機能の絞込みによる対応（事務用回転イス アガタ D）



アガタ D は、快適な座り心地は確保しつつも調整機能を極力少なくすると共に、調整が必要な部分は感覚的に使用できる操作性を追及することで、ユニバーサルデザインを実現しました。

・調整機能をなくしたリクライニング機構（図 1 0）

一般的なオフィスチェアにはリクライニングの反力調整機能が装備されていますが、操作が分からなかったり煩わしかったりで、使われないケースも少なくありません。アガタ D は、体重差によるリクライニング反力の影響が少なく、しかも快適な座り心地を実現する座面の後部と背もたれが一体となってリクライニングする機構を採用し、反力調整機能をなくしました。煩わしい操作がなく、快適にお使いいただけます。



図 1 0：リクライニング機構

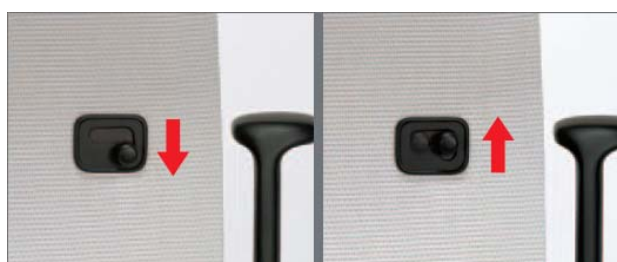


図 1 1：ランバーサポート調整

・感覚的に使えるランバーサポート調整機構（図 1 1）

アガタ D には背骨の S 形状の個人差に合わせることが出来るランバーサポート機能を装備しています。操作は感覚的に理解しやすいシンプルな方法です。分かりやすい背裏の位置にレバーを配置しました。

■ 終わりに

2005 年、コクヨグループは「ひらめき・はかどり・ここちよさ」というブランドメッセージを定めました。お客様が 100 人いれば、必ず 100 通り以上の“ひらめき”や“はかどり”や“ここちよさ”があります。商品を通してこれらを提供するために私たちが大切にしているのが、「お客様に訊け」という行動指針です。お客様が何を不満足と思っているのかを、尋ねるだけではなく、自らが言葉を発しながらお客様の要望を引き出し、感じとること、これが私たちの「お客様に訊け」です。これは正にユニバーサルデザインそのものであり、コクヨファニチャーではこれからお客様に訊くことを通してユニバーサルデザインの実現に向けて取り組んでゆきたいと考えています。

Case study: 労働環境プロジェクト

個人認証におけるユニヴァーサルデザイン

●はじめに

労働環境プロジェクトは、さまざまな特性を持つすべての人が気持ち良く働くことのできる未来オフィスの労働環境を実現することを目指して活動しています。労働環境における課題は実に数多くあり、これを全て同時に解決することは難しいので、具体的な課題に絞って検討しています。

2007年度までは、会議のユニヴァーサルデザイン(UD)にターゲットを絞って活動してきました。この結果については、IAUD公式サイトのメインページ(<http://www.iaud.net/index.php>)右側の「UDの部屋」でも公開しています。2009年1月からIAUD会員であれば何回でもダウンロードできるようになりました。

一方、2008年度からは新しく個人認証、特にICカード認証におけるUDをターゲットに定め、そのUD的項目について検討を行なっています。2010年開催の国際会議で裏付けのある提言ができることを目指して活動を行なっています。

●オフィスのセキュリティ意識の高まり

2001年9月11日米国での同時多発テロや個人情報保護法、企業の労務管理や内部統制、情報セキュリティシステム構築などの様々な理由で、普通のオフィスでも入退室管理システムや機器のアクセス制御が急激に普及してきました。

単純な入退室や機器の利用の可否判定だけでなく、労務管理や安全確保のために在館者をリアルタイムに把握したり、入館の記録をしたりするためにも個人認証の仕組みが用いられるようになって来ました。

個人認証の方法としては主に下記のような方法があります。

(1) 社員証などの認証ツールを使用する

現時点ではオフィスにおいてもっとも普及している方法です。

(2) 暗証番号を利用する

ある特定の番号列を入力する方法です。最近では覗き見を防ぐため、テンキーの配列がランダムに変化するものもあります。

(3) 生体認証を利用する

指紋や掌紋、手のひら静脈、虹彩、顔などを認識する方法です。

オフィスのセキュリティ上の問題は上記のような方法で解決されましたが、オフィスを利用する側から見ると、非常に面倒になったり、あるいはUD的に問題があったりするようです。

そこで労働環境プロジェクトではオフィスにおける個人認証のUD課題について、取り組むことにしました。

●オフィスの中のICカード認証

電車の改札やバスの乗降車のときに、SuicaやIcoca、PASMOなど非接触式のカードをタッチするというのが当たり前になってきました。同様にオフィスの中にもICカードで個人認証をする、ということが浸透してきました。

上で述べたように個人認証の方式は様々なものがありますが、もっとも普及の進み、私たちにもなじみのある非接触式の IC カード認証を題材に、オフィスの中の問題を考えていくことにします。

オフィスの中で、IC カードは入退室の際にドアの開錠やフラッパーゲート(図3を参照ください)の開閉だけでなく、PC や複合機などの利用者制限、キャビネットやカギのかかる棚の利用者制限に利用されています。また、社員食堂での精算や売店での支払いの際にも用いられています。

そこで労働環境プロジェクトでは、セキュリティ用途以外で用いられる IC カード認証の場面も含めて検討対象とすることにしました。

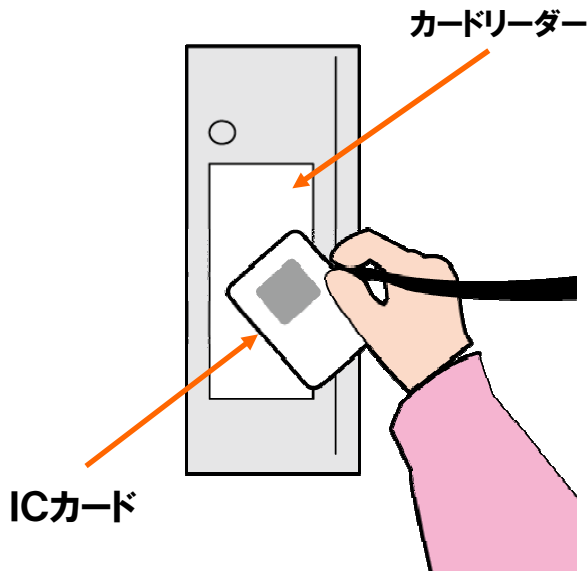
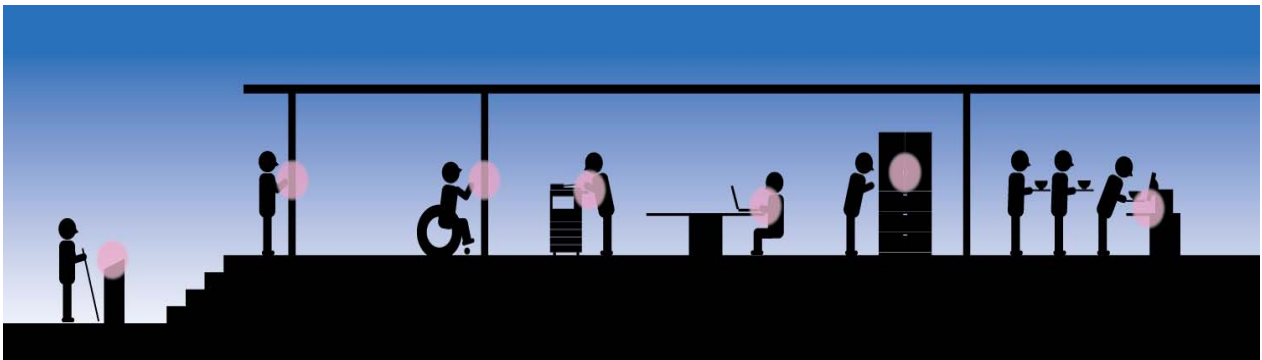


図1 非接触式の IC カード認証



●オフィスの中で IC カードが使われる場面とその問題点

図2 オフィスの中で IC カードが使われる場面(イメージ)

図2に示したように、オフィスの中の様々な場面で IC カード認証が用いられています。そのときのUD 的な課題について、いくつかの例を示します。



図3 フラッパーゲートを通る



図4 車椅子に座って認証する

図3は、首からかけている社員証をフラッパーゲートにかざしていますが、左手だとタッチしにくかったり、社員証のひもの長さによっては無理な姿勢をとることになったりします。

図4は車椅子に座ったままタッチしています。この場合には、リーダーの設置位置が簡単にタッチしやすいかどうか問題となります。

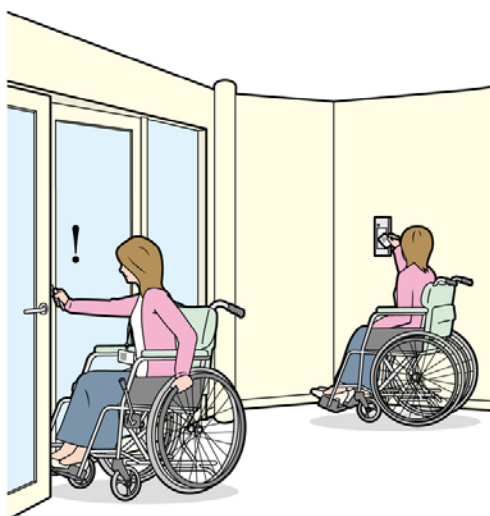


図5 タッチして（右側）からドア（左側）まで移動して入室



図6 カードリーダーがわかりやすい場所にあるか？

図5では、車椅子に乗った人が画面右側のリーダーにタッチしてから左側のドアに移動してタッチしていますが、方向転換や移動にかかる時間によっては、非常に慌しいものになりそうです。

視覚障がい者にとっては、カードリーダーのある場所を把握することが非常に難しいものとなっています。図6のようにドアの左手で高さが一定、というような決まりがないと使いにくいものになります。



図7 複合機（コピー機）の利用者制限



図8 PCへのログイン制限

図7は複合機（コピー機）の利用者制限をICカードによって解除している様子，図8はPCへログインする際にICカード認証をしている様子です。リーダーの設置場所や接触時間の設定によっては，図のように無理な姿勢をとらざるを得ない場合もあります。

●UDマトリックスを利用した課題分析

今までに述べてきたような困りごとを，標準化WGのUDマトリックスを使って体系的に整理してみました。

ICカード認証について，入退室，複合機操作PCの操作，食堂の精算という4つのタスクをそれぞれ縦軸にとって分析を行ないました。人の特性を横軸にする際は，単に障がいの有無だけでなく，暗くて見えにくい状況，うるさくて聞こえにくい状況，荷物やかさを持って動作に制約がある状況等についても検討しています。

ICカードを例にUDマトリックスを使ってタスクを分析

3/3

		入退室の操作ステップ			複合機の操作ステップ		PCの操作ステップ		食堂の操作ステップ		
		視覚			聴覚		手や足で操作する				
		全盲	弱視・老眼等	特殊な状況	全聾	特殊な状況	サイズ	利き手	運動能力		
入室時の認証	リーダーを確認	リーダーの設置位置確認が難しい 	リーダーの設置位置確認が難しい	リーダーとドアとの位置関係が状況によって不統一							
	認証	・リーダーの読み取り部分が確認できない ・視覚による開錠確認ができない	視覚による開錠確認が難しい		音による開錠確認ができない 				手をのばす 		
	ドアを開ける	ドアノブの位置が見つけにくい		タイムオーバーすると施錠されてしまう 			カードの持ち替えや無理な体勢 	カードの持ち替えや無理な体勢 	ドアノブをひねる動作		

図9 ICカード認証のUDマトリックス
（「2009年IAUDユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」パネルより）

●分析結果

UD マトリックスを使った分析によって、課題が整理されてきました。詳細分析まではいたっていませんが、この稿では中間報告という位置づけで下に記します。

(1) IC カード、カードリーダー個別の課題

IC カードは、社員証だけでなく健康保険証や定期券、銀行のキャッシュカード等増えてきており、視覚障がい者は、識別に苦勞しているようです。カードには種類ごとに異なる切り欠きがされていますが、まずはこれを徹底することが重要です。

また、リーダーの設置場所やカードを接触させる場所がわかりやすい作りになっていること、アクセスしやすい位置にあることも重要なポイントです。

(2) 情報提示方法

アクセス許可ランプが付く、チャイムが鳴る、「課金されました」という表示が出る、というような電子的な情報提示以外に、開錠の際にカチッと物理的な音がする、というのも重要な情報です。

また、開錠されないなどのエラー発生時に1種類の情報提示方法しかない、その情報にアクセスしにくい状況の場合、そのエラーが把握できません。例えば、工事中でうるさい場所でエラー音が鳴っても聞こえないというような例が挙げられます。

(3) リーダーと作用点の関係性

IC カード認証において、システム側は下記の2つの動作からなります..

A) リーダーで IC カードを認証する

B) 認証の結果、ドアが開錠される／機器のアクセスが許可される／課金される 等

ここで仮にBのポイントを「作用点」と呼ぶことにします。このリーダーと作用点の時間的な関係、および空間的な関係が課題である、と整理できそうです。

例えば、リーダーで認証し開錠したのに、荷物をあらためて持ち直している間に時間切れになり、また施錠されてしまった、認証してから体の向きを変えて数歩歩かないとドアを開けられない、というような問題があります。

(4) 心理的な問題

直接 UD マトリックスから導出された課題ではありませんが、操作に時間がかかってしまったり、操作に何回か失敗したりすると、後ろに並んでいる人や周囲に人に対する”気後れ”や”恥ずかしさ”という心理的な問題があります。

ここで分析した課題の中で、機器の個別の課題である(1)の解決は製造しているメーカーや業界団体に取り組んでいただければ、と考えています。異業種の集まりという特長を活かし、IAUD 労働環境プロジェクトでは(2)情報提示方法、(3)リーダーと作用点との関係性に焦点をあてて解決の方向性を探っていきます。

また(4)心理的な問題については、まだ解決の方向性すら見えていない状態ですが、これについても今後取り組んでいきたいと考えています。

●解決の方向性

個人認証のUDについて、まだ明確な解決案というものは打ち出せていませんが、検討の結果、いくつか方向性が見えてきました。その方向性について紹介します。

(1) 情報提示のカスタマイズの可能性

個人認証することによって、利用者が特定できるので、それを応用する方法が考えられます。例えば、個人ごとに希望する情報提示方法を事前に登録しておくことによって、課金情報をディスプレイでなく音声で読み上げる、ビーブ音で指示する、光で情報提示とタイミングを誘導する、

などを可変にすることで解決できる可能性があります。

(2) リーダーと作用点との関係

◇時間的な関係の整理

タッチしてから何秒間開錠しているか？等の課題です。ここで、(1)に関連して開錠時間を可変にすることで解決の可能性がります。

◇空間的な関係の整理

リーダーに対して IC カードをタッチするときの立ち位置や方向性と作用点までの距離や向きの関係、またそのときにどのような姿勢で操作することが考えられるか？等について吟味することで UD 的な解決が得られそうです。

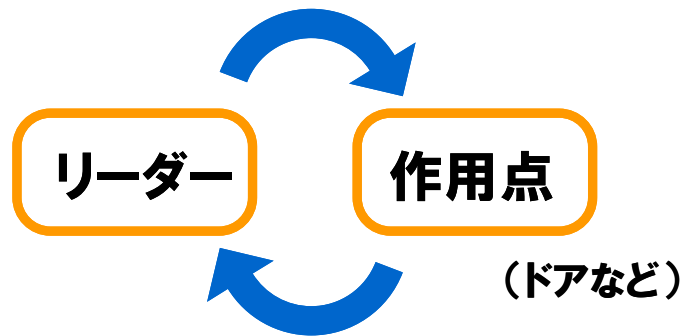


図10 リーダーと作用点との関係

●まとめと今後の課題

個人認証における UD について、現状の問題点を洗い出した。分析にあたっては、個人認証のなかで最も普及が進んでいる IC カード認証を題材に、UD マトリックスを用いて課題の整理を行ないました。明らかになった課題のうち、情報提示方法、リーダーと作用点との関係性については、いくつかの解決の方向性を示すことができました。

今後は、今回の分析結果を元にフィールド調査や識者、ユーザーとのディスカッションなどを通し、課題の詳細化とその解決策を探っていきます。そして、2010年の国際会議で、個人認証に関する提言することを目標に活動を行なっていく予定です。

世界の UD 動向

IAUD の準会員である北のユニバーサルデザイン協議会 (NUDA: 理事長 児玉芳明) から 2 月に開催されたワークショップについてレポートをいただきました。地域にしっかり根付いた活動が展開されているようで、IAUD として今後も引き続いてさらに連携を深めていければと思います。

IAUD Newsletter では会員の皆さまの活動についても、積極的に掲載させていただきますので、取り組み事例など、会員の皆さまへの情報発信にご活用くださるよう、よろしくお願いいたします。

第 3 回 NUDA サロン 雪まつり会場での「気付き発見」ワークショップ レポート



2009 年 2 月 19 日
NUDA 事務局 竹本 俊史
(大丸藤井株式会社)

NUDA の会員様向け (一般参加も可) に、知識の吸収や情報交換の場として開催している「NUDA サロン」。第 3 回目にあたる今回は、札幌市大通公園で開催された「第 60 回さっぽろ雪まつり」をフィールドに、障がい者や外国人が感じる「不便」に対する「ユニバーサルデザイン的な解決提案」へ向けた「問題点の発見 (=気付き)」をテーマに行いました。

■ワークショップ概要

- ・主催：北のユニバーサルデザイン協議会 (NUDA)
- ・共催：札幌市立大学
- ・協賛：ぺんてる株式会社、大丸藤井株式会社
- ・日時：2009 年 2 月 11 日 (水) 13:00~18:00
- ・会場：札幌市立大学サテライトキャンパス+第 60 回さっぽろ雪まつり大通会場
- ・参加人数：計 23 名 (ユーザー、スタッフ、ゲスト含む)



進行は、視力障がい者 (盲導犬ユーザー)、聴覚障がい者、車いす使用下肢障がい者、外国人をユーザーとした 4 つのグループを編成し、あらかじめ用意されたチェックシートに基づき、ユーザーへのヒアリングや実際のフィールド調査を行いました。そして、そこで出た様々な「気付き」をディスカッションし、いくつかに体系立てた「問題点」として整理の上、最後に簡易プレゼンテーションを行いました。その際、各グループに「コーディネーター」と呼ばれる進行役を 1 人設け、気付きの誘発やディスカッションの進行、またプレゼン時のスピーカー役を担いました。

当日は好天に恵まれたこともあり、各グループとも積極的に会場を巡っていました。会場内では、ところどころで立ち止まって話しあう姿もよく見られ、非常に熱心な調査が行われてい

ました。続いて、15分の休憩を挟んで行われたディスカッションでは、札幌市立大学の酒井正幸教授（NUDA副理事長）、柿山浩一郎講師両氏によるフォローの下、各グループとも活発な議論が展開されました。当初は論点のまとめに苦労する姿もありましたが、徐々に整理されていくにつれ、より具体性を増していく様子も見て取れました。最後に行われた簡易プレゼンテーションでは、各ユーザーならではの「気付き」に留まらず、「雪路に加え相当の混雑」という特殊条件における様々な問題などが幅広く発表されていました。



指摘されたものでは「インフォメーションセンターや救護センター、警備本部の位置が分かりにくい。入口に段差がある」「関係者の対応が不親切」「会場が騒音に満ち溢れている。静かな中で楽しみたい」「外国人への案内が不足している」「飲食店のメニューやカウンターが高い位置にあり、車いす使用者には読めないし、食事もできない」などがありました。

このように今回のサロンでは、ユーザーの生の声を通して出た様々な「気付き」が非常に印象深く、また参加した人全てにとって大きな財産になったと思います。札幌の冬の観光の目玉である「さっぽろ雪まつり」を見る新たな視点が生まれたという意味でも、大変意義のある会となりました。今後、調査結果を整理し、具体的な解決策を明示して、札幌市など雪まつり主催者などへ提言する予定にしています。



<タイムスケジュール>

- 13:00～ オリエンテーション
- 13:50～ フィールドワーク
- 15:25～ 休憩
- 15:40～ ディスカッション
- 17:30～ 成果発表・総括
- 18:00 閉会

*その後いただいた情報として、このワークショップで抽出された課題については、テーマを絞り込み、課題解決に向けた取り組みを継続していかれるとのことでした。今後の活動についても本誌で順次お伝えしてゆきたいと思います。（編集補記）

IAUD Newsletter 2008 年度バックナンバー

【4月号】



1. ごあいさつ：成川匡文 副理事長／情報交流センター所長
2. 特集：IAUD設立に至る道（1）「国際UD会議2002開催の経緯」
3. 東京電力のユニバーサルデザインの取り組み ～目の不自由な方にも安心して調理していただくための取り組みを例として～
4. Case study: 余暇のUDプロジェクト「CM字幕の実現に向けて…」
5. 世界のUD動向：ノルウェー、カナダ、ドイツより

【5月号】



1. 特集：IAUD設立に至る道（2）
「国際UD会議2002開催からIAUD設立まで（前編）」
2. コラム：IAUD設立に至る道（1）に寄せて～国際UD会議2002発起人からのコメント
3. 松下グループのユニバーサルデザインの取り組み
4. Case study: 移動空間プロジェクト
「シームレスインターフェースの実現を目指して」
5. 世界のUD動向：米国教育省、カナダ IFA、京都市ほか

【6月号】



1. 特集：IAUD 設立に至る道（3）
「国際UD会議2002開催からIAUD設立まで（後編）」
2. 富士通のユニバーサルデザインの取り組み～誰もが参加できるIT 社会を目指して～
3. Case study: 標準化研究WG
「IAUD マトリックス開発」UD 製品の開発に役立つ標準化のツール&プロセスの提案
4. 世界のUD動向：ノルウェーUD 講演実施報告ほか

【7月号】



1. 特集：生活者の視点で考える（1）～福祉の常識・非常識～
2. 日立グループのユニバーサルデザインの取り組み
3. Case study: 労働環境PJ
会議のユニヴァーサルデザインの提案
4. 世界のUD動向：Newsletter of Design For All Institute of India 2008年7月号発行ほか

【8月号】



1. 特集：生活者の視点で考える（2）～主婦連合会に聞くUD（前編）～
2. トヨタ自動車のUD取り組み
3. TOTOのUD取り組み ～「一人でも多くの方の快適」を目指して～
4. Case study: 住空間PJ
5. 世界のUD動向：ユニヴァーサルデザイン・アワード09ほか

【9月号】



1. 特集：生活者の視点で考える（2）～主婦連合会に聞くUD（後編）～
2. リコーグループのユニバーサルデザインの取り組み ～「人にやさしい」をたくさんの人に～
3. 岡村製作所のUD取り組み
4. Case study: 食のUDPJ
5. 世界のUD動向：第9回世界高齢者団体連盟(IFA)世界会議で石川嘉延静岡県知事が講演！ほか

【10月号】



1. 特集：生活者の視点で考える（3）
～つくり手の想いとユーザーコミュニケーション～
2. 日産自動車のUDの取り組み
～夢のあるイノベーションでユニバーサルデザイン社会を創造～
3. Case study: 衣のUDプロジェクト
4. 世界のUD動向：台湾ユニヴァーサルデザイン関連イベント・レポートほか

【11月号】



- <ごあいさつ> 発足5周年に寄せて IAUD 会長 山本卓眞
1. 特集：生活者の視点で考える（4）～AJU自立の家に聞くUD～
 2. UD家具へのチャレンジ！～日本の生活様式、高齢者に配慮した静岡家具の取り組み～
 3. Case study: まちづくりプロジェクト
 4. 世界のUD動向：バルセロナ・デザイン・ウィーク参加報告ほか

【12・1月号】



1. 新春特集：IAUDはどこへ向かうのか ～「IAUD 中期活動計画」の概要と方向性～
「IAUD中期活動計画」
2. 大日本印刷のUDの取り組み
3. 東芝グループにおけるUDへの取り組み
4. Case study: 余暇のUDプロジェクト・アウトドアチームの取り組みのご紹介
5. 世界のUD動向：サステナブルデザイン国際会議レポートほか

【2月号】



1. 特集：生活者の視点で考える（5）～企業人も生活者、(社)日本フィランソロピー協会に聞くUD～
2. 三菱電機グループのユニバーサルデザインの取り組み
3. イトーキのユニバーサルデザイン
4. 積水ハウスのUDの取り組み
5. 情報交流センターご紹介～IAUD 活動活性化のため、顔の見えるセンターを目指して～
6. 世界のUD動向：ユニヴァーサルデザイン・アワード'09 審査会参加報告ほか

【3月号】



1. 特集：2008年度活動をふりかえって～研究開発企画部会 PJ/WG 主査座談会
◇「2009年 IAUD ユニヴァーサルデザイン大会 in 東海」速報
 2. コクヨファニチャーのユニバーサルデザイン
 3. Case study: 労働環境プロジェクト～個人認証におけるユニヴァーサルデザイン～
 4. 世界のUD動向：第3回 NUDA サロン
雪まつり会場での「気付き発見」 ワークショップレポート ほか
- 巻末 IAUD Newsletter 2008年度バックナンバー

【編集後記】○今月号はUD大会の影響もあり発行が遅れてしまい申し訳ありませんでしたが、本誌でも皆さんの活動成果や盛況だった大会の様子をしっかりとお伝えしていきたいと思えます。現在、来年度の活動計画や予算が検討されています。厳しい経済環境の中、全体の予算規模縮小はやむを得ないとして、UDへ取り組む気持ちはシュリンクさせず、こういう時だからこそUDをブレイクスルーとして生かそうとするマインドをより強く持ち続けたいものです。(葛)

○優先席。高齢者、障がい者、妊婦、幼児連れなどの人たちが優先的に座れるよう確保してある席で、地下鉄車両の前と後の左右両側に設置されています。自分是对象ではないといって満員の状態でも座らずに空席のままにしまう人、はからずも座ってしまい、「バツの悪い顔」や「狸寝入り」をする人、様々です。通常席の前で立ち往生している高齢者の姿を見受けることもあります。座っている人は優先席の方に行けばという顔。優先席として区別することで変なことが起きているのではないのでしょうか。全てが優先席であるべきだと思います。必要とされる人が乗ってきた時に、さりげなく席を譲るという心づかいが出来るようになれば良いことだと思います。この気づきがUDを思い起こしてくれるのではないのでしょうか。(矢)

IAUD Newsletter では、誌面を会員の皆さまのUDに関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業のUD商品開発事例やPJ/WGの活動成果事例等の情報をお寄せください。また、国内外のUD関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお知らせください。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいは情報交流センターまでお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter No.12
2009年3月6日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局 : 225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話: 045-901-8420 FAX: 045-901-8417
e-mail: info@iaud.net
情報交流センター: 104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
(IAUD サロン) トヨタ八丁堀ビル 4階
電話: 03-5541-5846 FAX: 03-5541-5847
e-mail: salon@iaud.net